

日本大学工科校友会

# 桜 工

1971—**52**

S46



日本大学校歌

相馬御風 作詞  
山田耕筈 作曲

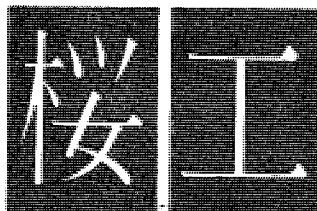


1. 日に日に新たに 文化の華の さかゆく世界  
世界の曠野の上に 朝日と輝く 国の名負ひて  
巍然と立ちたる 大学日本 正義と自由の旗標の下に  
集まる学徒の 使命は重し いざ 讃へん 大学日本 いざ 歌はん  
われらが理想
2. 四海に先んじ 日いつる国に 富嶽とゆるがぬ  
建学の基礎 栄ある歴史の道一すじに 向上息まざる  
大学日本 治世の一念ほのほと燃ゆる われらが行く手の 光を見よや  
いざ 讃へん 大学日本 いざ 歌はん われらが理想

若きエンジニア

堀内敬三 作詞作曲

1. 昭渙の日出づる国こそわが祖国  
其の名をば担いて聳ゆわが母校  
伸びゆく日本の力は茲に  
地を拓き行く者若きエンジニア
2. 青春に夢あり宇宙に真理あり  
現実と理想を結ぶもの我等  
科学の力と不屈の意志を  
武器として進まん若きエンジニア



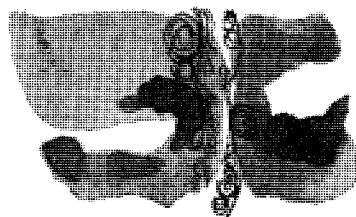
日本大学  
工科校友会誌  
1971  
Vol. 19  
No. 52

◆学部長一年生の心境……………	木村秀政…	3
◆校友会誌の復活について……………	柴田 衛…	4
◆古田会長追悼の辞……………		5
◆斎藤先生を偲ぶ……………	加藤 渉…	5
<hr/>		
ゴルフ・ブルース……………	鈴木雅次…	6
そろばんの功罪(下)……………	安藤三郎…	8
欧州旅行記……………	新沢順悦…	11
欧州「見周」旅行……………	佐藤恒夫…	14

☆部会だより

土 木……………	17
建 築……………	18
機 械……………	19
電 気……………	20
化 学……………	21
薬 学……………	22
数 学……………	23
物 理……………	24
交 通……………	25

☆学内報……………	26
☆本会記事……………	29
☆地方・職域支部長名……………	30
☆卒業生就職状況(45年度)……………	31





## 学部長一年生の心境

理工学部長 木村 秀 政

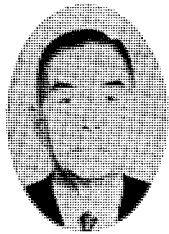
私が、始めて日大に来たのは、昭和22年9月のことだから、今年で24年目を迎えることになる。それまで官学に務めていた期間が19年だから、日大の方が長いわけである。こんなに長い間、日大に務めていられたのも大へん居心地がよかったからで、その点、校友諸兄にも感謝したい気持ちがいっぱいである。今では私自身すっかり日大マンになりきったつもりであるし、そういう意識では校友諸兄にも負けないつもりである。こんなに長い間務めながら、私は学生の教育のかたわら、航空関係の仕事に没頭する自由を与えていただき、学校管理の面では何もお手伝いする機会がなかった。このまま、のんきな自分で停年まで自由に振舞わせていただける、と思っていたところ、斎藤前学部長が、昨年急逝され、学部長という大任が私のところに回ってきた。

人間歳をとるにつれて、とにかく何々長といった役目を押し付けられるもので、私も航空関係では政府機関や、学界関係で会長とか委員長とかいうものを、いくつか引受けさせられて来た。しかし、日大の学部長とは、世間一般の「長」とは違う何ものかがあるような気がして、どんなことでも割合あっさり引受ける性質のある私も、さすがに考えさせられた。いよいよ決心してお引受けしてからも、顔を合わせた校友から「おめでとう、といたいところだが、ご苦労さまでしょ」といわれると、これはえらいことになった、と後悔する気持ちさえてきた。ところが昨年7月25日に学部長になってから、今日で7ヵ月余り、現在の心境を卒直にいうと、やる気十分というところである。停年の関係で、任期が3年以内に限られているという気安さもあるが、このような心境になった最大の原因は、理工学部あるいは日本大学という世界が、やりたい、と思って努力すると、その成果が次第に挙げてくるところだということが、わかってきたからである。学部長になる前の意識では、日本大学というのは、まことに巨大であり、従って慣性が大きいため、何かちょっとしたことを改善したり、合理化したりしようとしても、大学本体はびくとも動かず、返って慣性の方則通りに、こちらがはね返えされてしまうこと。日本大学というところは、まことに複雑しかも怪奇な組織をもっているのです、どこかで筋をとおし、すっきりさせようと思っても、ひとつの筋が他のいくつかの筋と複雑にからまりあっているのです、ちょっとやそっとの努力や工夫ではどうにもならない——そんなところだというふうに認識していた。

そこで、この巨大なマンモスと取組んで、少しでも、理工学部をよくするためには、まず学部教職員全体が、一致協力する体制を作ることが必要だ、と考え、その中核として6人の担当教授と事務長、経理長をもって私のスタッフとし、スタッフ——主任会議——教室会議あるいは職員会議のブロック線図をとおして、全教職員の意向が学部の運営方針に反映し、また逆にスタッフの運営方針が、全教職員に徹底するような道を作った。担当教授は学務担当が粟津教授（土木）学生担当が三宅教授（電気）管轄管財担当が加藤教授（建築）企画担当が松代教授（精密機械）調査広報担当が原教授（物理）習志野校舎担当が古館教授（一般）である。担当教授会議、あるいはこれに各科の主任教授を加えた主任会議は、毎週開かれていて、そこで立案された施策はできるだけ早く実行するようにしている。実施された細かい改善点をここでいちいち述べる余裕はないが、こういう細かい改善や合理化が積み上げられて、やがて目立った成果が現われることを期待している。大きな合理化の1つとして、学期期日の変更が挙げられよう。今年から前期の授業は例年

より10～15日繰上げられ、4月1日から始まり、7月20～25日で前期試験を含めて前期授業は完了する。従来は前期授業の1部と試験が夏休み後に持越され、まことに中途半端だったが、この合理化により、学生はゆっくり夏休みをエンジョイし、新しい気分で9月下旬からの後期授業を迎えることができるだろう。

本部というところは、正直のところ大へんな所と認識していたが、学部長あるいは理事として7ヵ月余り経験したところでは、昔のことはいざ知らず現在の本部は、正しい意見に耳を傾けるところであり、それが十分におおところだ、と信じている。もちろん大世帯のことだから、ちょっとしたアイデアを出したくらいでは、あっちにぶっかり、こっちにぶっかりしているうちに、いつのまにか潰れてしまう可能性が多い。しかし、努力次第では何とかなるといのが、私の今日の心境である。校友諸兄の一層のご鞭撻、ご協力をお願いしたい。



## 校友会誌の復活について

会長 柴田 衛

永らく中断しておりました校友会誌が、今回諸兄の努力で復活することとなりました。校友会の重要な事業の一つであり、学校と校友とを結ぶ流通の経路である校友会誌が復活されたという事は真にうれしいことでもあります。校友会が会誌を発行するという事は、ある意味からは当然のことではありますが、これが出来なかったところに校友会の姿勢は非常であったといえます。

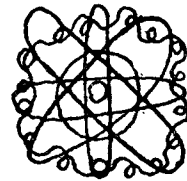
41年1月東京大学に端を発し爆発した学校騒動は、燎原の火の如くわが国の殆んどの学校をなめつくし伝統を誇る東大を始め母校日本大学にまで及んだのであります。このことが、校友会の諸般の運営に影響を及ぼし、一時校友会の活動を停止せざるを得ぬ結果を招来したのであります。

悪夢のような激動時代は既に過ぎ去りました。戦争のような争ひを繰返した古きずには、今は触れぬこととしよう。再び、太陽を仰いで旧に優るとも劣らぬ母校の現状に対して万歳を叫びましょう。今は教授諸先生も、校友諸兄も、学生諸君も母校の過ぎ去った姿を拭い去ろうとして、前向きに努力しているのですから。校友会も年々の卒業生の積上げで、今や総数、約8万名の大家族に膨れ上り、全校友を一堂に集める場所もない始末、新しいうれしい悩みであります。同じ学園に進んだお互いが、校友として学園を中心に、集団を組むところに大きな社会的意味がある。

この集団を大切にしたいものであります。この集団の強固なほど学園は繁栄するものであります。この結びつきに欠かすことの出来ないものが、機関紙校友会誌であります。たかが一冊の雑誌ではあるが、その任務は甚だ重大であります。その雑誌が休刊していたことは甚だ申し訳ないと思っております。これからは、このようなぶざまの姿は校友諸兄には見せたくないと思ひます。

従って、この雑誌は校友会の役員のものではなく、校友全員の流通をつける唯一の機関であるとして校友の活躍するところの総て、専門学説よし、諸兄の近況よし、グループニュースまたよし大小の記事の数々が、紙面を詰めつくすようお願いしたいと思ひます。

最後にひとこと校友会の実状につき申し上げたい。校友会の経済状態は会費未納等のため容易ではありません。詳しくご了解を得ずともお判りのことと存じます。全校友の方々が意義ある集団の隆盛を、双手にあげて守り通して戴きたいと、お願いする次第であります。



---

■会誌委員／委員長中山隆（土木）  
／土木・下青木秀吉，木村吉己／建  
築・丸田操，広瀬力／機械・両角豊  
志，黒瀬元雄／電気・高橋信夫，館  
和夫／化学・黒沢喜久雄，伊藤和雄  
／薬学・山内盛

---

■昭和46年3月20日印刷／25日発行

■編集兼発行人／高木政司

■発行／日本大学工科校友会（東京  
都千代田区神田駿河台1の8／電話  
東京293—3251内線206／振替・東京  
162710）

■印刷／鉄鋼新聞社神保町工場